

漢字ナーダム —中等教育段階のモンゴル人学習者を対象にした競技大会—

篠原学爾 (新モンゴル高専)

1. モンゴルの初等中等教育における日本語教育について

モンゴルの普通教育は、それぞれ5、4、3年制の初等、前期中等、後期中等学校からなっています。大半の学校はこれらの三つの段階で一貫教育をしており、日本語教育が行われている学校も一貫校が多いといえます。

2006年度まで基本的な必修外国語は英語かロシア語とされていましたが、2007年度からは第一必修外国語が英語となり、第二必修外国語がロシア語になりました。選択科目か選択必修科目の第三外国語として日本語、中国語、韓国・朝鮮語等が教えられている学校もあります。ただ、一定の条件を満たせばどの言語を必修外国語としてもよい、と決められているので、学校によっては日本語を必修外国語として教えています。

国際交流基金の2015年度日本語教育機関調査⁽¹⁾によると、モンゴルの初等教育における日本語学習者数は1,811人、中等教育におけるそれは4,556人で、合わせて全体の学習者数9,914人の64.3パーセントを占めます。モンゴルの人口、約300万のうちの約1万人弱が日本語を学習しているということは、モンゴル人の約300人に一人が日本語学習者であるという計算になります。

一方で、日本学生支援機構の平成28年度外国人留学生在籍状況調査⁽²⁾によれば、日本には2,184人のモンゴル人が留学しています。この人数が、約300万のモンゴルの総人口に占める割合は0.07パーセントです。つまりモンゴル人の約1,400人に一人が現在、日本に留学していることとなります。この高い日本留学率の要因の一端を担っているのが、初等中等教育における日本語教育なのではないでしょうか。

2. 「漢字ナーダム」の概要

上述したように、モンゴルは人口あたりの日本留学人数が多く、またウランバートルでは日本語を理解し、また話す現地人に出会うことがよくあります。

彼らモンゴル人日本語学習者が、発音をはじめとする話す力において、他の国や地域の学習者に比して秀でていることを指摘する日本語教師は少なくありません。その一方で、読解や作文など、読んだり書いたりすることが得意な学習者は、管見ではそれほど多くないようです。日本語教師の中には、その原因の一つとして、漢字に対するモンゴル人学習者の苦手意識を挙げる者がいます。

「漢字ナーダム」は、こうした視点に立つウランバートル市在住の日本語教師と、同地で活動中の青年海外協力隊員とによって2016年に初めて企画されました。ナーダムという言葉が、モンゴル語で「祭典」や「競技」を意味するように、一言で言えば、参加する日本語学習者が漢字にまつわる競技を通して競い合うという催し物です。はじめは単なる思い付きに過ぎなかった企画を練り上げ、開催に漕ぎつけるまでには、当地に派遣されている国際交流基金の日本語専門家の方からの、惜しめない助言と支援を賜りました。



第二回の入賞者に贈ったバッジ

第一回の企画に際しては、以下の二つの目的が掲げられました。

第一に、モンゴル人学習者全般に漢字に対する苦手意識が存在するとすれば、参加学習者がそれを克服し、日本語への学習意欲を高めることです。

第二に、参加学習者が漢字に触れることを通して日本文化への理解を深めることです。

参加対象者は、同市内で日本語教育を実施している学校に通う、6年生から12年生の学習者にしました。企画者の勤務先や活動場所が、主に中等教育課程の教育機関だったからです。

6年生から12年生は、日本の中学と高校の学齢にほぼ相当していることから、漢字ナーダムにおいても中学と高校という二つの部門が設けられました。また学校対抗で行われるという競技の性格上、参加申し込みは各学校を通して実施されています。

この催し物は、モンゴル日本語教師会、在モンゴル日本大使館、及び在モンゴル日本人会などの支援を受けており、現地の日本人社会に好意的に受け止められていると考えてよいと思

います。

3. 第一回漢字ナーダム

第一回の漢字ナーダムは、2016年5月28日に、ウランバートル市内のモンゴル・日本人材開発センター（以下、モンゴル日本センター）にて開催されました。参加したのは、同市内の7つの初等中等教育課程の学校に通う64人の生徒でした。



第一回開催時の日本人会会長による開会の辞

競技種目は筆記のみで、文に埋め込まれた漢字の読み方の問題を500問解いて競うという内容でした。問題作成にあたっては、主に日本語能

12. テムジン（Тэмүжин）と呼ばれた若者がいました。 /3
13. テムジンは、敵に負けずに生き残り、モンゴルの英雄である
チンギス・ハーン（Чингис хаан）となりました。 /6
14. テムジンの父は、イエスゲイ（Есүхэй）です。 /1
15. イエスゲイ（Есүхэй）はタタル（Татар）部族と戦います。 /3
16. しかし、毒殺されました。 /2
17. チャガタイ（Цагадай）は兄で、オゴデイ（Өгөдэй）は
弟です。 /2
18. チェチエゲン（Сэцэйхэн）は姉で、トムルン（Түмэлүн）は
妹です。 /2
19. 彼らの両親は、テムジン（Тэмүжин）・ボルテ（Бөртэ）
夫妻です。 /5
20. テムジン（Тэмүжин）とボルテ（Бөртэ）は恐らく、
モンゴルで 一番有名な 夫婦でしょう。

力試験のN5からN3までの出題範囲とされる漢字を中心に選び、N2とN1からも数問出題しました（前頁「例文にモンゴルらしさを出した筆記問題」参照）。

この問題の採点作業をこなす為に、多数の現地日本語教師や青年海外協力隊員を始めとする方々に助けて頂きました。

閉会後のアンケート調査の結果は、この初の試みに概ね好意的なものだったと言えます。運営と実施の方法についての問では、

「とてもよかった」及び「よかった」という答えが合わせて86パーセントとなりました。また問題の内容に関しては、「悪かった」という回答は皆無で、「あまり面白くなかった」という答えも3.2パーセントだったのに対して「とても面白かった」或いは「面白かった」と回答した参加者の割合が53.9パーセントを占めました。この行事の第一回は一定の成功を収めたと考える所以です。

その一方で、問題の数量については、43.8パーセントの参加者が「多すぎ」若しくは「多い」と答えたことが、次回への反省課題として残されました。

3. 第二回漢字ナーダム

第一回の開催から半年後の、同年12月11日には、同じモンゴル日本センターで、第二回の漢字ナーダムを実施しました。前回同様、初等中等教育課程の7校から、二回目は58人の参加者がありました。

第一回とは趣を変えて、漢字の知識の豊富でない参加者も楽しめるように、娯楽性の強い様々な競技を盛り込みました。例えば、一列に並んだ参加者が、自分の前の人の背中に指で書く漢字を順繰りに先頭の人まで伝える速さを競うものや、画面上に映し出された複数のパネルを一枚ずつめくって行って、隠れている漢字をあてるものなどです。

筆記競技は残したものの、第一回の反省を踏まえて問題数を100問に減らし、出題範囲もN5及びN4相当の漢字に限定しました。それでも採点作業にはやはり時間がかかり、一回目に

続いて多数のボランティアの方々に協力頂いたお蔭で、何とか終わることができました。



第二回における競技の説明

第二回でも実施した事後アンケートの結果では、意見にばらつきが見られました。

まず、運営と実施の方法についての質問では、「とてもよかった」が19.0パーセント、「よかった」が37.9パーセントで、合計56.9パーセントだった一方で、「あまりよくなかった」が3.4パーセント、「悪かった」が25.8パーセントでした。運営への評価が前回よりも芳しくなかったことは、自由筆記の感想に端的に表れていました。そこには、「運営が悪かった」という意見だけでなく、「アンフェア」、「カンニング」、「混乱」といった言葉まで見られました。

競技の問題の内容についても、意見がやや二分し、8.6パーセントの「普通」を挟んで「とても面白かった」と「面白かった」の合計が65.5パーセント、「悪かった」と「あまり面白くなかった」が25.8パーセントという結果でした。

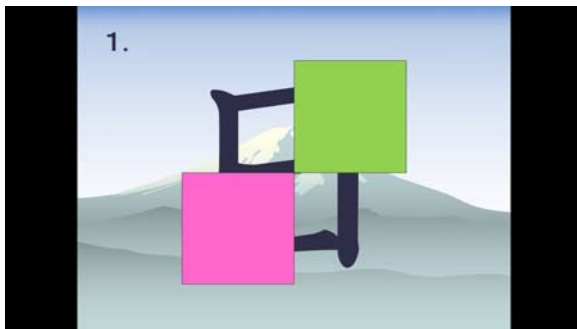
前回の懸案だった問題の数については、「普通」という回答が58.6パーセントを占めたので、多少は状態を改善できたのではないのでしょうか。

第二回の課題は、好意的に評価された部分を維持しつつも、低評価に終わった部分とその原因について考え、適宜軌道修正していくことだと考えました。

4. 今後の漢字ナーダムとその課題

第三回の漢字ナーダムは、2017年11月15日現在、三日後の11月18日に、場所を国立教育大学に移す形で催される運びとなっています。

第二回の開催から一年近くが経過しての再開となりましたが、漢字に親しむきっかけとなることを目指す、という前回からの路線に変わりはありません。ただ、反省を踏まえながら行事に新鮮味を加える為に、幾つかの競技種目の入れ替えを行いました。この変更に対する参加者の評価は、事後アンケートの結果を待って判断すべきでしょう。



4章で触れたパネル漢字クイズの第一問

最後に、今後の漢字ナーダムのあり方について二点指摘して、結びとします。

第一に、これからの漢字ナーダムの課題は、如何に日本人中心の運営体制を脱却し、モンゴル人主体の催し物にしていくか、だと思っています。その意味では、今回は前向きな兆候が見られました。前回は大幅に上回るモンゴル人日本語教師や学生らのボランティアが企画段階から主体的に参加しているからです。この傾向が途切れることなく続いて、漢字ナーダムが名実ともにモンゴル人によるモンゴル人の為の催し物となる日が来ることを願ってやみません。

第二に、望むらくは、日本語教育を実施している各学校でも、小規模な漢字ナーダムを開催してもらいたいものです。その結果として、所謂「お勉強」とは異なる形で漢字に触れる機会が、より多くの学齢期のモンゴル人学習者に与えられるとすれば、第一回の企画に関わった者にとってはこの上ない喜びだと言えましょう。

参考文献

- (1) 国際交流基金 (2017) 『2015年度日本語教育機関調査』
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/spreadsheet.pdf> (2017年11月28日アクセス)
- (2) 日本学生支援機構 (2017) 『平成28年度外国人留学生在籍状況調査』
<http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2016/index.html> (2017年11月28日アクセス)